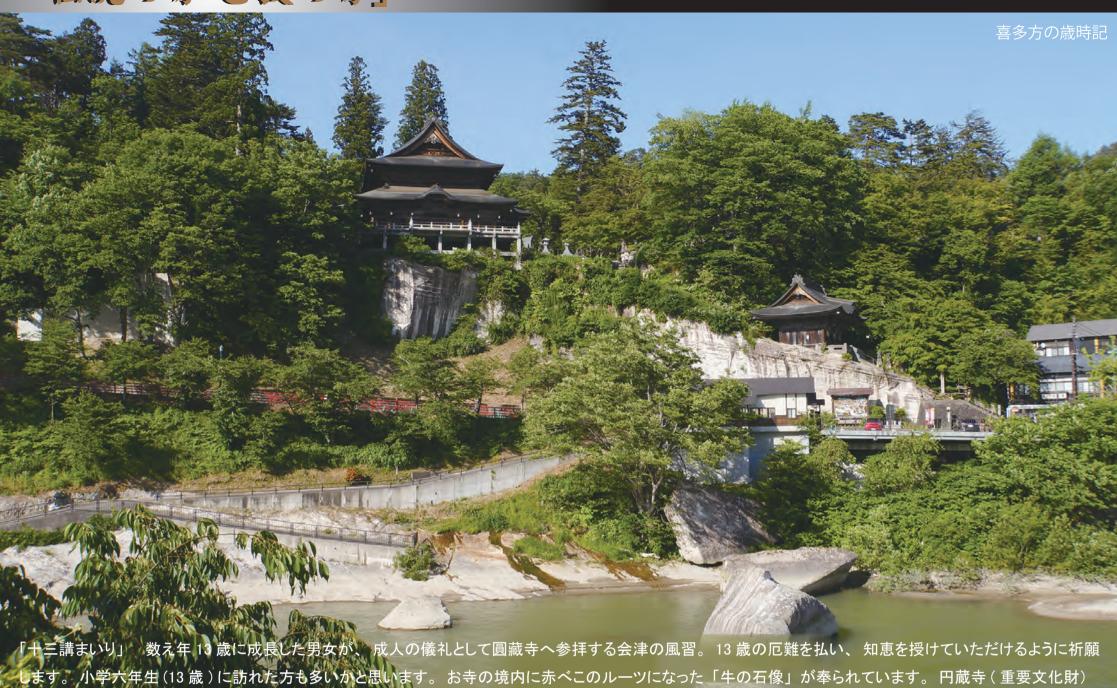
「伝統の味と技の味」

喜多方からの便り 2020 年 6 月号



病気との戦いーコロナの早期終息と感染予防祈願

■「赤べこ伝説」

今から 1200 年ほど前、高僧「徳一」が柳津町に虚空蔵尊円蔵寺を造った際に、大量の資材を運ぶのに赤い牛が大活躍しました。 会津が困ったときに、この赤い牛が助けに現れるという言い伝えが、 赤べこ伝説の始まりと言われております。 会津では牛のことを「べこ」と呼びます。

■「張り子の赤べこ」



400 年ほど前の蒲生氏郷公が会津を所領した際に、京都の職人を呼んで張り子の製造を手がけ、やがて伝説の「赤べこ」を張り子で造らせました。天然痘が流行した際に、病気の子どもに「赤べこ」を贈ったところ、たちまち治ったという話が伝わり、「赤べこ」が大人気になりました。「赤べこ」の赤色は魔除け・厄病除けを表し、胴体の黒丸は疫病から身を守ると言う意味があります。天然痘は紀元前から世界中で猛威を振るった致死率の高い、恐ろしい感染症でした。

■「野口英世と母シカ」 について

野口英世は耶麻郡猪苗代町出身の細菌学者です。(1876-1928)。野口英世は若くして渡米し、ロックフェラー医学研究所にて細菌研究で成果を上げます。大正4年に英世は一度だけ帰国し耶麻郡の郡役所があった、ここ喜多方町で帰国報告会が開催され、盛大な歓迎会が行われました。当家にも直筆の書が残されています。しかし、大正7年(1918年)、母の野口シカは、当時世界の1/4が感染し5,000万人が亡くなったと言われるスペイン風邪にかかり、66歳で他界してしまいます。一方野口英世はノーベル賞に3回推薦されましたが、アフリカで研究していた黄熱病に感染し51歳で他界しました。ウイルスは細菌の1/50程の大きさで当時の顕微鏡では見つけにくいものでした。

■「ウィルスとの戦い」

遥か昔より、感染症は人々の生活に大きな影響を与え、感染症と戦い、生き延びてきた歴史があります。 黄熱病はワクチンで、天然痘は種痘で 1980 年頃にほぼ制圧されました。しかし「新型コロナウイルス」のように、現在でも未知のウイルスとの戦いは続いています。 それでも人間は科学の力でウイルスに勝てることを確信しています。 野口英世が説くように、多くの人と支え合い、「生」きるということが求められていると感じます。

■「赤べこ」

「赤べこ」は「コロナの早期終息と感染予防」を念じ、温かく見守っていてくれます。

会津の美味しい食材やお酒、どこか懐かしく温もりある和雑貨などを通して、心穏やかなひとときを過ごしていただけたらと願っています。



虚空蔵尊円蔵寺にある赤べこ



野口英世の書「生・英世・為 冠木先生」



若喜商店「赤べこ絵付け体験」